

ハンドボールにおける左サイドのシュートプレーに関する一考察

～世界レベル、日本レベル、学生レベルの男子選手を対象に～

佐藤 奏吉 (200711970、ハンドボール方法論)

指導教員：會田 宏、河村 レイ子

キーワード：サイドシュート、シュートコース、シュートの種類

【目的】

サイドシュートは角度の狭いところからジャンプしてゴールキーパーをかわしてシュートが打たれるため、他のポジションとは違った専門的なシュート技術が必要である。たとえば、GKに対応されないよう、一定のタイミングで打つのではなく、クイック、ノーマル、セーブタイミングを状況によって使い分け、緩急をつけながら打つことが有効である。腕の振り、シュートコース、シュートの種類などのバリエーションも GK に対応していくために必要であると考えられる。本研究では、左サイドのシュートプレーをシュート達成までのプロセスに着目して分析し、世界のトッププレーヤー、日本のトッププレーヤー、学生のトッププレーヤーを対象に、左サイドのシュートプレーの技術的特性を明確にし、今後の指導に役立てたい。

【方法】

学生、日本リーグ、世界レベルにおけるトップレベルの選手の試合を分析の対象とした。人数、試合、場面は、学生が2人、18試合、69場面、日本リーグが5人、17試合、39場面、世界が3人、20試合、64であった。サイドプレーヤーがボールもらってからシュート達成までの動作に着目し、私案の用紙を用いて集計をおこなった。

分析項目は歩数、ボールの保持、踏みきり脚、助走の方向、ジャンプの方向、体の変化、タイミング、腕の振り、シュートコース、シュートの種類、DFとの接触であった。各レベルと分析項目の関係、分析項目とシュート結果の関係を明らかにするためカイ2乗検定を行った。統計処理の有意性は5%で判定し10%以下は傾向ありと判断した。

【結果と考察】

学生、日本リーグ、世界レベルの間に有意差または傾向差があったのは踏みきり脚とジャンプの方向であった(表1)。競技レベルが高いほど左脚で踏みきり、イン側にジャンプする傾向にあった。歩数(表2)、ボールの保持位置、踏みきり脚、助走の方向、腕の振り、体の変化、タイミング、シュートコース、シュートの種類に有意差と傾向差はみられなかった。シュート結果、すなわち、ゴールインとノーゴー

ルとの間に有意差または傾向差があったのはDFとの接触であった。DFのプレッシャーが少なければ成功率が高くなっていた。歩数、ボールの保持位置、踏みきり足、助走の方向、ジャンプの方向、腕の振り、体の変化、タイミング、シュートコース、シュートの種類に有意差と傾向差はみられなかった。

【結論】

本研究では、世界のトッププレーヤーはコーナーから左脚で踏みきりイン側に大きくジャンプすることがわかった。左脚でのジャンプは右脚の踏みきりに比べ、滞空時間を長くできる。そのため、GKのセービングに対してシュートタイミングを絞らせないようになり、シュート角度も広がる。世界のトッププレーヤーほど少ない歩数で踏みきり、左脚で大きくイン側にジャンプしてシュート達成していた。

また、本研究では、DFのプレッシャーを受けないサイドシュートが有効であることがわかった。いかに早くシュート達成できるかが重要であると考えられる。そうすることでDFのプレッシャーを受けず、GKの位置取りを遅らせることができるといったアドバンテージを得ることもできると考えられる。

表1 踏みきり脚とレベルの関係

	学生	日本	世界
左脚	47(72.3%)	30(73.1%)	54(93.1%)
右脚	17(26.2%)	8(19.6%)	3(5.2%)
両脚	1(1.5%)	3(7.3%)	1(1.7%)
合計	65(100%)	41(100%)	58(100%)

カイ2乗値=16.538、 $p<0.01$

表2 歩数とレベルの関係

	学生	日本	世界
0歩	1(1.5%)	0(0%)	0(0%)
1歩	41(63.1%)	24(58.5%)	35(60.3%)
2歩	15(23.1%)	13(31.7%)	21(36.2%)
3歩	8(12.3%)	4(9.8%)	2(3.5%)
合計	65(100%)	41(100%)	58(100%)

カイ2乗値=6.357、ns